住み慣れた地域で

「自宅のよう」家族も安心

長岡・サポートセンター摂田屋

年を取って介護が必要となっても、住み慣れた地域で安心して最後まで暮らしたい―。こう願う人は多いが、高齢化社会の中でどう実現していけばよいのだろうか。長岡市の社会福祉法人「長岡福祉協会」が運営する総合ケアセンターは、その先進事例として注目されている。高齢者を一施設に集めて地域から切り離すのではなく、市内各地に点在するサポートセンターで、住民らも関わる形でサービスを提供している。センターの一日をのぞいた。（報道部・渡辺隼人）

長岡市のJR宮内駅から徒歩約10分、住宅地の一角にサポートセンター摂田屋（同市摂田屋5）はある。ウッドデッキを備えた約2400平方㍍の敷地に、特別養護老人ホームと小規模多機能型居宅介護、配食サービスを手掛ける事業所がある。グループホーム（94）は「私の家は歩いて15分くらいで、街場の方が良くて選んだ。お祭りやハーモニカ奏者を呼んでくれ、楽しいです」とにっこり。

小規模多機能型のスペースでは、デイサービス利用者が編み物や計算練習など思い思いのことをしている。小規模多機能型はデイサービス、ショートステイ、訪問介護を選んで使える介護サービス。国も在宅介護支援のため、推進に力を入れている。グループホームでもテレビを見たり、洗濯物を畳んだりする姿があり、アットホームな雰囲気が漂う。

入所する母親に会いに来た近所の会社員男性（58）は「家族や母の知人にとってはすぐ近くにある方が来やすくて良い。ここは自宅みたいで母もさみしくないようです」と喜んでいた。

■　■

長岡福祉協会は約30年前、長岡市の中心部から離れた郊外に、特養など100人規模の介護施設「こぶし園」を開設した。しかし入所者が住み慣れた地域で暮らせる方が望ましいと1992年に初めてのサポートセンターをオープン。現在、市内各地に摂田屋のようなサポートセンターが15カ所ある。こぶし園の入所者も徐々に、もともと住んでいた地域のサポートセンターに戻してきた。

各地の特養は定員20人前後と小規模で、以前は4人部屋だったが個室になった。認知症や要介護度等、それぞれの状態に応じたサービスも可能になった。

2010年に開所したサポートセンター摂田屋は地域住民らも訪れやすいよう、複数の出入り口を設けている。家族だけでなく、学校帰りの児童や近所のボランティアらが気軽に立ち寄っていく。子どもたちはゲームやボール遊びをして